

環境と利益 策を練る

一流を目指す

4年目を迎えたHBM S

4

大学時代、少ない所持金で外国を旅行するバックパッカーにはまった海外ビジネス課主任の松原一樹さん(38)は、ベトナムを選んだ」と表情を崩す。ブラジルからアルゼンチンへと2カ月かける。2018年4月、HBM S(県立広島大学経営管理研究科)に入社したのは、「論理的に物事を整理し、経営戦略を学びたかった」からだ。経歴が面白い。

千葉大1年のとき、リュックサックを背負って世界を巡っていた四つ年上の女子大生に憧れた。

「英語をはじめ、外国語がペラペラだった。彼女は南米には行ったことがなかった。だから私は、南米を選んだ」と表情を崩す。ブラジルからアルゼンチンへと2カ月かける。2018年4月、HBM S(県立広島大学経営管理研究科)に入社したのは、「論理的に物事を整理し、経営戦略を学びたかった」からだ。経歴が面白い。

在学中に5回、イスラエルに渡航した。卒業後、東京の宝飾品関連企業に就職したのも、イスラエ

ベトナムのエビ養殖 課長松原一樹さん



ベトナムの養殖エビに関する研究を進める松原一樹さん(左)。後方は、ゼミ教官の吉川成美准教授—南区の県立広島大学院で

ルに商売の拠点があったに水産商社に転職。南米からだ。ダイヤモンドのチリに赴任し、仕入れを仕入れに携わり、3年後 任された。そして、20

15年3月、出身地の広がる。島市に本社がある外国人エビの世界的生産地で、大量のエビを食する日本人も恩恵を受けている。

「インバウンド(訪日外国人)が増えていた時期で、海外と関わり続けたかった」。海外経験のあるMBA(経営学修士)資格を持つ上司に出会ったことが転機となり県庁の中途採用試験を受け、16年4月、海外ビジネス課に配属された。

急激な経済発展を遂げたベトナムでは、環境に対する意識が年々高まりつつある。県内には水質浄化の高い技術を持つ企業が多く、県は同国南部のソクチャン省、カントー市と約6年前から交流を進め、環境浄化産業分野での協力協定を締結。ひろしま環境ビジネス推進協議会(事務局・海外ビジネス課)には、約170の企業・団体が加わ

「ソクチャン省は養殖エビの世界生産地で、大量のエビを食する日本人も恩恵を受けている。しかし、水質浄化が追いついておらず、社会問題化。これを何とかしないといけない」と話す。そして、「政府主導で『環境』と現地の人には言うだけで心には響かない。もうけが出て、更に環境浄化が進む。その方策を示したい」と意気込む。

MBAホルダーを目指すし入学した松原さん。「エビを食べる日本人と、現地で暮らす人々の共通の利益を目指し、授業後に仲間とエビバルを巡るのも調査の一つと考えている。私が一流になれるかどうか、それは覚悟次第だと思っています」と表情を引き締めた。

【元田 植】
二つづく